

# 大学生における不合理な信念と スチューデント・アパシー傾向との関連について

A73149 松本由香

## 【背景】

スチューデント・アパシー (student apathy) とは、1960年代にアメリカのP.A.ウォルターズ Jr.が大学生に特有の無気力状態に対して用いた概念である。引き籠もりや長期留年に陥るが、アルバイトや趣味など本業以外では精力的に活動することもある。女性より男性に多く、アメリカや日本で顕著とされる。しかし、近年男女差が小さくなってきているとの指摘 (内田、2008) があり、今日では、中学生から30歳代までこのような状態像が見られている。スチューデント・アパシーについては実証的な研究が少なく、統一的な定義もなされていない状態である。(下山、1996) 不合理な信念 (irrational belief) は論理療法 (A. エリス) の中心的概念である。イラショナル・ビリーフとは、「現実に即さない非合理的な信念」であり、「ねばならない」「べきである」といった要求・命令・絶対的な思考パターンである。(中田、2006) イラショナル・ビリーフについての研究は、不安、抑うつ、敵意等の情緒的喚起の強度との関連 (Goldfried & Sobocinski, 1975) , 日本においては不安との関連 (松村、1992) などがある。

## 【目的】

本研究では、「心理的原因で学生の本業である学問に対して意欲の減退とし、サークルやバイト、趣味など本業以外では精力的に活動すること」をスチューデント・アパシーの定義とする。大学生に対し調査を行い、不合理な信念とアパシー傾向に関連があるかを検証する。

## 【仮説】

仮説1. 不合理な信念の「問題回避」が高い人は授業からの退却傾向がある。

仮説2. 不合理な信念の「外的無力感」が高い人は学生生活からの退却傾向がある。

## 【方法】

対象者 : 私立大学の学生 380名

調査期間 : 2010年12月に講義の時間を利用

手続き : 質問紙調査を実施し、集団法を用いた。所要時間は10~15分であった。

使用尺度 : 不合理な信念を測定する尺度として、『日本版 Irrational Belief Test (Japanese Irrational Belief

Test : JIBT)』を用いた。日本版 JIBT は松村 (1991) が作成した。全70項目で第1因子「自己期待」、第2因子「問題回避」、第3因子「倫理的非難」、第4因子「内的無力感」、第5因子「依存」、第6因子「協調主義」、第7因子「外的無力感」以上7因子で構成される。「5. 非常にあてはまる」から「1. 全然あてはまらない」の5件法である。

アパシー傾向を測定する尺度として、鉄島 (1993) の『アパシー傾向測定尺度』を用いた。

鉄島 (1993) は、「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義し、一般学生のアパシー傾向を実証的に研究するために、「アパシー傾向測定尺度」を作成した。全31項目で第1因子「授業からの退却」、第2因子「学業からの退去」、第3因子「学生生活からの退去」以上3因子で構成される。「6. いつもそうである」から「1. まったくそうでない」の6件法である。

フェイス項目では性別・学科・学年・年齢を聞いた。

## 【結果】

質問紙を集計した結果、配布数380部のうち回収集数367部、回収率は90.2%であった。このうち、有効回答数は346部で、有効回答率は95%であった。性別は男性が134人(39%)、女性が212人(61%)であり、全体の60%が女性で占められていた。年齢は18歳~28歳、平均年齢は22歳であった。

### ①相関分析

不合理な信念の因子、①自己期待、②問題回避、③倫理的非難、④内的無力感、⑤依存、⑥協調主義、⑦外的無力感、アパシー傾向の因子⑧授業からの退却、⑨学業からの退去、⑩学生生活からの退去の関係を検討するため相関分析を行った。以下の表2は不合理な信念の因子とアパシー傾向の因子の相関係数を表したものである。

表 2. 不合理な信念とアパシー傾向の相関係数

		アパシー傾向		
		⑧授業からの退却	⑨学業からの退去	⑩学生生活からの退去
不合理な信念	①自己期待	0.045	-0.180**	0.033
	②問題回避	0.195***	0.292***	0.443***
	③倫理的非難	0.082	0.162**	0.208***
	④内的無力感	0.198***	0.307***	0.368***
	⑤依存	0.194	0.303***	0.303***
	⑥協調主義	0.050	0.094	0.104
	⑦外的無力感	0.065	0.107	0.298***

\*,p<.05, \*\*,p<.01, \*\*\*,p<.005

N=346

不合理な信念における「問題回避」とアパシー傾向とされる「授業からの退却」の間では  $r=0.195$ 、 $p<.005$  で弱い正の相関が認められた。「問題回避」と「学業からの退去」の間では  $r=0.292$ 、 $p<.005$  と弱い正の相関が認められた。「問題回避」と「学生生活からの退去」の間では  $r=0.443$ 、 $p<.005$  と弱い正の相関が認められた。「外的無力感」と「学生生活からの退去」との間には  $r=0.30$ 、 $p<.01$  と正の相関がみられた。

② t 検定

授業からの退却平均の男女差をみると、女性より男性の方が授業からの退却平均が 4.1 点高いことがわかる。そこで t 検定によって男性と女性の差を検討したところ有意な差がみられた。 $(t(345)=3.32$ 、 $p<.005)$  よって、男性は女性より授業からの退却傾向があるということが言える。次に学業からの退却平均の男女差をみると差は 0.5 点と女性の方が高い。t 検定によって男性と女性の差を検討したところ有意な差はみられなかった。学業からの退去は男女の差がないということがわかった。

表 3. アパシー傾向の各因子と性差

	男性	女性
授業からの退却平均	39.7 (11.45)	35.6 (11.26)
学業からの退去平均	46.3 (7.82)	46.8 (6.64)
学生生活からの退去平均	22.9 (5.68)	23.0 (5.07)

() は標準偏差

【考察】

不合理な信念とアパシー傾向の相関を行い、不合理な信念における「問題回避」とアパシー傾向とされる「授業からの退却」の間では  $r=0.195$ 、 $p<.005$  で弱い正の相関が認められた。不合理な信念の「問題回避」が高い人ほど「授業からの退却」傾向があるということは、不合理な信念がアパシー傾向の要因になる可能性があるということが支持された。

「問題回避」は責任や面倒な事柄からの回避の必要性に関するもので、この「問題回避」が高い人は低い人に比べて「集団に溶け込めない」、「社会的場面で当惑する」悩みといった、集団や社会的な場面での悩みが高い事が認められた。(木村、2004) このことから、問題回避傾向がある人は集団や社会的な場面での悩みと授業や学生生活から退却が重なってアパシー傾向があがる事が考えられる。問題回避の因子は他の因子に比べてアパシー傾向の各因子とどれも相関があるため、集団や授業に対して避けようとする行動をとることが考えられる。「外的無力感」と「学生生活からの退去」との間には  $r=0.30$ 、 $p<.01$  と正の相関があった。「外的無力感」と「学生生活からの退去」のこの2つは外的無力感が上がると学生生活からの退去の傾向があがるという仮説2が支持された。外的無力感は外部の影響に関する無気力をあらわし、他人や社会、過去の出来事に関するコントロール不可能感の正当に関するイラショナル・ビリーフである。このビリーフを強く持つ学生は他者や社会などの外部の影響に対して自分は無力であると考えたために、それが自己への否定的な評価へとつながり、対人場面や社会場面において不安が生じると考えられる(木村、2004) このように自分は外部に対して無力だという自己への否定的評価は学生にとって身近なもので、単位や欠席の日数、試験の事などに不安を持つ為に途中で履修を諦め、欠席する回数が増える事が考えられる。そのため外的無力感が上がると、休学や退学など学生生活から退去してしまう要因になるのではないだろうか。

【引用・参考文献】

大石由起子編 (2009) 『青年期の危機とケア』 ふうろう出版 pp60-69  
 坂野雄二編 (2008) 『臨床心理学キーワード[補訂版]』 有斐閣双書 pp74  
 木村真人 (2004) 「論理療法の ABC 理論による対人不安の検討」 東京成徳大学研究紀要 第 11 号 pp51-60  
 長内優樹 (2009) 「無気力の測定法に関する展望」 大正大学大学院研究論集第 33 号  
 松村千賀子 (1991) 「日本語版 Irrational Belief Test (JIBT) 開発に関する研究」 心理学研究第 62 巻第 2 号 pp106-113